

日本語の「敬語」：「丁寧語」について

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2020-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023205>

〔論文〕

日本語の「敬語」

—「丁寧語」について—

What is the Teichou-go

(Another Politeness Expression in Japanese Honorifics)

江村 裕文

EMURA Hirofumi

0 日本語の「敬語」

「(外国人日本語学習者にとって：筆者注)なぜ「敬語」が難問なのかというと、敬語というものが人間関係を維持したり、あるいは新しい人間関係を開拓したりする言語的な手段であるからでしょう。つまり、人間関係というものが極めて複雑で、しかも流動的なものであるということから、ある場面でどう言ったら正しいか、どう表現したら適切か、という判断は、教科書で文型を覚えてただけではできないのです。その場合には人間関係に対する知識や経験が不可欠だからです。」①

これは、アルクが出版していた、日本語教師用の『月刊日本語』の連載の中で、柴田武氏が「敬語」について述べている部分である。

たしかに外国人にとって日本語の「敬語」は学習が困難な教授項目である。それはこの(文法)ルールが、日本語という言語自体の構造上の問題ではなく、日本語母語話者が日本語をどう使用するかという日本語「語用論」上の問題であり、さらに日本語母語話者がその表現の際に言及する人物(複数)についてどういう人間関係の像を描こうとしているのかという、日本語母語話者の人間関係の把握の仕方の問題でもあるからである。

ただ、ここでは日本語の「敬語」の「日本語語用論」や「敬語のダ

イクシス」の話ではなく②、ずっと手前の、日本語の「敬語」の基本的な枠組みについて確認しておきたい。

以下、「敬語」についてのおそらくもっとも初期のおおやけの資料として「Ⅰ 文化庁『これからの敬語』(1952)」を、次に「Ⅱ」として、「菊地康人『敬語再入門』(1996)」、「Ⅲ」として「文化審議会『敬語の指針』(2007)」、「Ⅳ」として「滝浦真人『ポライトネス入門』(2008)」を紹介していくが、「Ⅱ」以下の三点は「丁重語」について言及した最近の出版物である。本稿では、菊地(1996)や文化審議会(2007)に新たに提示された「丁重語」について考えてみたい。

注

- ① 柴田(1989) p.51
- ② 「日本語の敬語の語用論」や「敬語のダイクシス」については、滝浦(2008)の当該箇所を参照されたい。

Ⅰ 文化庁『これからの敬語』

国語審議会会長土岐善麿氏が当時の文部大臣天野貞祐にあてた「建議」には、

「国語審議会は、かねて敬語の用い方について審議していましたが、昭和27年4月14日総会において別冊「これからの敬語」を議決いたしました。ついでに国語改善の実をあげるため、その趣旨が広く普及徹底するよう適当な処置をとられることを要望します。」①
と書かれている。

つまり、「文化庁『これからの敬語』」は、その「まえがき」にあるように、

「これからはこうあるほうが望ましいと思われる形をまとめたもの」である。②

以下、「これからの敬語」の「1 人をさすことば」「4 「お」「ご」

の整理」「6 動作のことば」「7 形容詞と「です」を、適宜省略しながら、引用する。

1 人をさすことば

(1) 自分をさすことば

「わたし」を標準の形とする。

「わたくし」はあらたまつた場合の用語とする。

「ぼく」は男子学生の用語であるが、社会人となれば、あらためて「わたし」を使うように、教育上、注意をすること。

「じぶん」を「わたし」の意味に使うことは避けたい。

(2) 相手をさすことば

「あなた」を標準の形とする。

「きみ」「ぼく」は、いわゆる「きみ・ぼく」の親しい間がらだけの用語として、一般には、標準の形である「わたし」「あなた」を使いたい。したがって「おれ」「おまえ」も、しだいに「わたし」「あなた」を使うようにしたい。

4 「お」「ご」の整理

(1) つけてよい場合

相手の物事を表す「お」「ご」で、それを訳せば「あなたの」という意味になるような場合。たとえば、

お帽子は、どれでしょうか。

ご意見は、いかがですか。

真に尊敬の意を表す場合。たとえば、

先生のお話 先生のご出席

慣用が固定している場合。たとえば、

おはよう おかず おたまじゃくし

ごはん ごらん ごくろうさま

おいでになる（すべて「お——になる」の型）

ごらんになる（すべて「ご——になる」の型）

自分の物事ではあるが、相手の人に対する物事である関係上、それをつけることに慣用が固定している場合。たとえば、

お手紙（お返事・ご返事）をさしあげましたが

お願い お礼 ご遠慮

ご報告いたします

(2) 省けば省ける場合

女性のことばとしては「お」がつくが、男子のことばとしては省いていえるもの。たとえば、

〔お〕米 〔お〕菓子 〔お〕茶わん 〔お〕ひる

(3) 省くほうがよい場合

たとえば、

(お) チョッキ (お) くつした (お) ビール

(ご) 芳名 (ご) 令息 (ご) 父兄

(ご) 調査された (これは「調査された」または「ご調査になった」が正しい)

(ご) 卒業された (これは「卒業された」または「ご卒業になった」が正しい)

6 動作のことば

動詞の敬語法には、およそ三つの型がある。すなわち、

語例	I	II	III
書く	書かれる	お書きになる	(お書きあそばす)
受ける	受けられる	お受けになる	(お受けあそばす)

第1の「れる」「られる」の型は、受け身の言い方とまぎらわしい欠点はあるが、すべての動詞に規則的につき、かつ簡単でもあるので、むしろ将来性があると認められる。

第2の「お——になる」の型を「お——になられる」という必要はない。

第3の型は、いわゆるあそばせことばであって、これからの平明・簡素な敬語としては、おいおいにすたれる形であろう。

7 形容詞と「です」

これまで久しく問題となっていた形容詞の結び方——たとえば、「大きいです」「小さいです」などは、平明・簡素な形として認めてよい。

「これからの敬語」は、「敬語」についてのありうべき規範を定めたものであるにもかかわらず、例えば「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」等についての解説は一切ない。以下、言及されている内容について検討する。

「1 人をさすことば」では、話し手が自分に言及する際には「わたし」を、聞き手に言及する際には「あなた」を使うのが標準の形としている。言い換えれば、第一人称代名詞は「わたし」で、第二人称代

名詞は「あなた」ということになる。

これはまったく日本語の現実の使用を無視した決まりである。5～6歳の男の子に「ほく」と呼びかけたり、同年齢の女の子に「わたし」と呼びかけないで、どちらも「あなた」と呼びかけるというのはふさわしいのか。また親や先生に「あなた」と呼びかけるのはふさわしいのか。

この問題を正面から扱い、日本語には「第一人称」や「第二人称」はないとして、それぞれ「自称詞」「他称詞」と称して、日本語の実情からまとめなおしたのが、鈴木孝夫であった。③

「4 「お」「ご」の整理」では、「(1) つけてよい場合」の最初の「相手の物事を表す「お」「ご」の場合」や二番目の「敬意の意を表す場合」というのは「尊敬語」であり、四番目の「自分の物事で、相手に対する関係上、慣用が固定している場合」というの「謙譲語」である。「尊敬語」の「お／ご——になる」が「つけてよい場合」というの（三番目）も違和感を感じる。同じく三番目に入っている「ごはん」は現在の「美化語」であろう。④

「6 動作のことば」で「動詞の敬語法」としてまとめられているのは「尊敬語」の話である。「お／ご——する」という「謙譲語」に関する記述はない。

「7 形容詞と「です」」は、「大きいです」「小さいです」、つまり「形容詞+です」の形を許容するという内容である。これは簡単にいうと「文体」の「丁寧度」の話題であり、具体的には名詞や動詞の場合には、三つの区別が観察されるのに対し、形容詞の場合には「普通形」と「特別丁寧形」しかない、という問題である。

	名詞	動詞	形容詞
普通形	山だ。	行く。	大きい。
丁寧形	山です。	行きます。	
特別丁寧形	山でございます。	いらっしゃいます。	大きゅうございます。

つまり、「大きい」ではぞんざいで、「大きゅうございます」では丁寧すぎると感じられる場合に、適当な表現がなかったので、「大きいです」を許容したというわけである。

	名詞	動詞	形容詞
普通形	山だ。	行く。	大きい。
丁寧形	山です。	行きます。	大きいです。
特別丁寧形	山でございます。	いらっしゃいます。	大きゅうございます。

ところが、本来なかった語形をここで許容したために混乱が生じることになった。形容詞の完了形である。正しいのは「大きかったです」か「大きかったです」なのか。あるいは両方を「た形」にした「大きかったです」なのか。

	名詞	動詞	形容詞
普通形	山だった。	行った。	大きかった。
丁寧形	山でした。	行きました。	? 大きかったです。 ? 大きかったです。 ? 大きかったです。
特別丁寧形	山でございました。	いらっしゃいました。	大きゅうございました。

注

- ① 文化庁 (1952) p.1
- ② Ibid. p.3
- ③ 鈴木 (1973)
- ④ 「お／ご」については、菊地 (1996) pp.106-107 を参照されたい。

Ⅱ 菊地康人『敬語再入門』：八分類

「菊地康人『敬語再入門』」は、「敬語」についてもっとも包括的な研究書『敬語』および一連の敬語に関する研究により「金田一京助記念賞」を受賞した著者が、「実用面に配慮し」①、「簡明さを趣旨として執筆した」②著作である。

まず (1) として「従来の「敬語」論：三分類」を引用し、(2) として「新しい「敬語」論」を引用して紹介する。

(1) 従来の「敬語」論：三分類③

「尊敬語」：話し手が主語を高める表現。

「先生は明日お帰りになります。」：「お帰りになる」：「お～になる」

「(先生の) おからだ」：所有者(先生)を高める

「謙讓語」：話し手が主語を低める表現。

「私が先生をご案内しました。」：「ご案内する」：「お～する」：謙讓語 A

「父は明日帰宅いたします。」：「(帰宅) いたす」：「いたす」：謙讓語 B

「(先生への) お手紙」「愚息」

「丁寧語」：話し手が聞き手に対して丁寧に述べる表現。

「本です。」：「です」

「来ます。」：「ます」

：「ございます」

「お暑い中をようこそ・・・」：「お暑い」

以上が従来の「敬語」論である。

この敬語論の前提として、菊地は、「尊敬語」および「謙讓語」は<話題の敬語>であり、「丁寧語」は<対話の敬語>であるという区別を示している。④

敬語	<話題の敬語>	「尊敬語」・「謙讓語」
	<対話の敬語>	「丁寧語」

のちに見る滝浦はこの各敬語間の関係について、次の図のようにまとめている。⑤

敬語	次元		
	<素材の次元>	<素材敬語>	「尊敬語」・「謙讓語」
	<対話の次元>	<対者敬語>	「丁寧語」

さて、菊地は、新しい敬語論として、以下の六つの敬語と二つの準敬語を認めている。つまりは八分類である。

(2) 新しい「敬語」論⑥

「尊敬語」： 主語<Ⅱ・Ⅲ人称>を高める。

「これ、お使いになりますか。」：「お～になる」

「社長がスピーチをなさった。」

「…(ら)れる」「なさる・いらっしゃる・おっしゃる・召しあがる・くださる」など

「(先生の) ご住所」「先生 (から) のお手紙」：所有者を高める

「謙讓語 A」：補語(「…を…に」など、動作の関係する方面)<Ⅱ・Ⅲ人称>を高め、主語<普通はⅠ人称>を補語より低く位置づける。

「今日お訪ねして(伺って) よろしいですか。」：「お～する」

「私が社長をご案内した(ご案内申し上げた)。」「ご～する」

「お／ご～する」「お／ご…申し上げる」「申し上げる・存ずる・さしあげる・伺う」など

「(先生への) お手紙／ご挨拶」：向かう先を高める。

「謙讓語 B」：主語<Ⅰ人称>を低め、聞き手に丁重さを示す。

「私もその会に出席いたします(まいります)。」

「…いたす」「いたす・まいる・申す・存じる・おる」など。

「愚息・拙者・小社・弊社」など。

「丁重語」： 聞き手に対する丁重さをあらわす。ただし主語は<高める必要のないⅢ人称>

「向こうから中学生が／車がまいりました。」など。

「謙讓語 AB」：補語<Ⅱ・Ⅲ人称>を高め、主語<Ⅰ人称>を低め、聞き手に丁重さを示す。

(私があなたを) ご案内いたしましょう。」「お／ご…いたす」のみ

「丁寧語」： 聞き手に丁寧に述べる。

「です・ます」「ございます」

「お暑い」

他に、準敬語がある

「美化語」：話し手がきれいに述べる。「お菓子・ご飯」

「改まり語」：話し手が改まって述べる。「本日・先程」

注

① 菊地 (1996) p. iv

② Ibid. p. v

③ Ibid. pp.16-17

- ④ Ibid. pp.88-89
- ⑤ 滝浦 (2008) p.59
- ⑥ Ibid. pp.102-103

Ⅲ 文化審議会『敬語の指針』：五分類

全部で70ページをこえる大部の「文化審議会『敬語の指針』」は、「平成17年3月30日に、文部科学大臣から文化審議会に対して、「敬語に関する具体的な指針の作成について」及び「情報化時代に対応する漢字政策の在り方について」が諮問され、文化審議会国語分科会において検討することとされた。」①

という経緯で検討され、

「昭和27年4月の「これからの敬語」と、平成12年12月の「現代社会における敬意表現」(中略)の内容を吟味して、「これからの敬語」で個別的に扱われた敬語をより全体的な視野から検討すること、また「現代社会における敬意表現」(中略)で扱われた「敬意表現」のうち、敬語に焦点を絞ることを心掛け、答申「敬語の指針」を作成するに至った。」とされている。②

内容は、「第1章 敬語についての考え方」「第2章 敬語の仕組み」「第3章 敬語の具体的な使い方」「おわりに」からなっており、そのあと(参考資料)として委員名簿や審議経過等がまとめられている。

ここで検討したいのは、「敬語の種類と働き」が扱われている「第2章 敬語の仕組み」③である。以下に「第1 敬語の種類と働き」④を、適宜省略しながら、引用する。

次の「表1」はこの「指針」における敬語の種類である。⑤

第1 敬語の種類と働き

1	尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型
2	謙讓語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型
3	謙讓語Ⅱ(丁重語)	「参る・申す」型

4	丁寧語	「です・ます」型
5	美化語	「お酒・お料理」型

次の表は、この「指針」と従来の敬語論との対応をしめたものである。⑥

5種類		3種類	
1	尊敬語	1	尊敬語
2	謙譲語Ⅰ	2	謙譲語
3	謙譲語Ⅱ（丁寧語）		
4	丁寧語	3	丁寧語
5	美化語		

以下、それぞれ5種類の敬語の働きについての解説である。

1 尊敬語⑦

相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。

行為等（動詞、及び動作性の名詞）	いらっしゃる・おっしゃる・なさる・召し上がる
	お使いになる・御利用になる
	読まれる・始められる
	お導き・御出席・（立てるべき人物からの）御説明
ものごと等（名詞）	お名前・御住所・（立てるべき人物からの）お手紙
状態等（形容詞など）	お忙しい・御立派

解説1 <行為者>に対する敬語、<行為者>を立てる表現

解説2 「先生のお名前」は<所有者>である「先生」を、「先生はお忙しいようですね」は「忙しい」状態にある「先生」を立てる表現

解説3 尊敬語は、「その人物を敬って述べる」「その人物に一定の距離を置いて述べる」等、その人物を言葉の上で高く位置づけて述べる。この「言葉の上で高く位置づけて述べる」について「立てる」を用いる

2 謙譲語Ⅰ⑧

自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごと・状態などについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。

伺う・申し上げる・お目に掛かる・差し上げる
お届けする・御案内する
（立てるべき人物からの）お手紙・御説明

解説1 <向かう先>に対する敬語、<向かう先>を立てる表現

解説2 「先生にお届けする」「先生を御案内する」などの「先生」は<向かう先>である。「先生の荷物を持つ」「先生のために皿に料理を取る」の「お持ちする」「お取りする」も「先生」も<向かう先>。

「先生からお借りする」の「先生」は、物の移動の向きについて見れば<向かう先>でなく「出どころ」であるが、「借りる」側からは、「先生」が<向かう先>と見ることができる。

解説3 「先生へのお手紙」「先生への御説明」のように、名詞についても<向かう先>を立てる。

3 謙譲語Ⅱ（丁重語）⑨

自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの。

参る・申す・いたす・おる

拙著・小社

解説1 自分の行為を、話や文章の相手に対して改まった述べ方で述べることにより、これが、丁重さをもたらす。「参る」は<相手>に対する敬語

解説2 「向こうから子供たちが大勢参りました。」「あ、バスが参りました。」「夜も更けて参りました。」のように、「第三者」や「事物」について使う。「話や文章の相手に対して丁重に述べる」という働きを果たしている。立てなくても失礼に当たらない第三者や事物についても謙譲語Ⅱを使うことができる。

解説3 「相手側」の行為や「立てるべき人物」の行為について、「(あなたは)どちらから参りましたか。」「先生は来週海外へ参ります。」などと使うのは、不適切である。

補足ア 「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ」との違い

謙譲語Ⅰは<向かう先>に対する敬語、謙譲語Ⅱは<相手>に対する敬語

謙譲語Ⅰの場合、「先生のところに伺います。」とは言えるが、「弟のところに伺います。」とは言えない。謙譲語Ⅱの場合、「先生のところに参ります。」とも言えるし、「弟のところに参ります。」とも言える。

謙譲語Ⅰの場合、<向かう先>としての「先生」に対する敬語で、謙譲語Ⅱの場合、<相手>としての「先生」に対する敬語である。

謙譲語Ⅰは、「ます」を伴わずに使うこともできる。「明日先生のところに伺うよ。」謙譲語Ⅱは、一般に「ます」を伴って使う。「明日先生のところに参るよ。」は不自然である。

補足 イ 謙讓語Ⅰと謙讓語Ⅱの両方の性質を併せ持つ敬語

「お(ご)・・・いたす」

「駅で先生をお待ちいたします。」は「駅で先生を待ちます。」と同じ内容であるが、「待つ」の代わりに「お待ちいたす」が使われている。「お待ちする」(謙讓語Ⅰ)と「いたす」(謙讓語Ⅱ)の両方が使われていることになる。「待つ」の<向かう先>である「先生」を立てるとともに、「いたす」で<相手>に対して丁寧に述べることになる。

4 丁寧語⑩

話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。

です・ます

解説 「○○です。」は「○○だ。」「起きます。」は「起きる。」とそれぞれ同じ内容であるが、「です」「ます」を文末に付け加えると、話や文章の相手に対して丁寧に述べることになる。「です」「ます」は<相手>に対する敬語。更に丁寧さの度合いが高い敬語として「(で) ございます」がある。

補足 謙讓語Ⅱと丁寧語

「謙讓語Ⅱ」も<相手>に対する敬語として働くので、「丁寧語」と近い面を持つ。

謙讓語Ⅱは「自分側」のことを述べる場合に使い、特に「相手側」や「立てるべき人物」については使えないのに対し、丁寧語は「自分側」のことに限らず、広く様々な内容を述べるのに使える。また謙讓語Ⅱは丁寧語「です」「ます」よりも改まった丁寧な表現である。

5 美化語⑪

ものごとを、美化して述べるもの。

お酒・お料理

1の尊敬語とは違って、<行為者>や<所有者>を立てるものではない。2の謙讓語Ⅰとは違って、<向かう先>を立てるものでもない。3の謙讓語Ⅱや4の丁寧語とは違って、<相手>に丁寧に、丁寧に述べているということでもない。「ものごとを、美化して述べている」

柴田(1989)は最後の<美化語>について、「<美化語>は自分のステータスを飾る手段として出てきた」⑫という指摘をしていることを確認しておきたい。

注

- ① 文化審議会 (2007) p.1
- ② Ibid. p.1
ただし、ここであげられている国語審議会答申(2000)『現代社会における敬意表現』については、ここで扱おうとしている敬語の分類等についての記述がないため、言及することはしなかった。
- ③ Ibid. pp.13-32
- ④ Ibid. pp.13-23
- ⑤ Ibid. p.13
- ⑥ Ibid. p.13
- ⑦ Ibid. p.14
- ⑧ Ibid. p.15
- ⑨ Ibid. p.18
- ⑩ Ibid. p.20
- ⑪ Ibid. p.21
- ⑫ 柴田 (1989) p.54

IV 滝浦真人『ポライトネス入門』

「滝浦真人『ポライトネス入門』」には、ブラウン&レヴィンソンのポライトネス理論①の観点から日本語の「敬語」をまとめている部分があり②、そこで「尊敬語」「謙譲語」とともに「丁重語」も扱っているので、ここで参考にしたいと考えた。

滝浦 (2008) によると、「【敬語の機能と語形】」は以下のとおりである。③

名称	機能	代表的な語形
「尊敬語」	動作主待遇 (ソト待遇)	「お／御・・・になる[です]」 「～(ら)れる」「おっしゃる」等
	例：「御自分でお持ちになりますか？」 「予定では社長は3時のご出発です」	
「謙譲語」	受容者待遇	「お／御・・・する」「さしあげる」等
	例：「書類はあとで私がお持ちします」 「お客様は社長がご案内するそうです」	

「丁寧語」	聞き手待遇	「です」「ます」「ございます」
	例：「これ、ほんとうにおいしいです」 「お席はこちらでございます」	
「丁重語」	動作主待遇（ウチ待遇）	「参る」「申す」「致す」「存ずる」等
	例：「すみません、存じませんでした」 「父がどうしてもと申すものですから・・・」	

これとまったく同じ観点からのまとめが滝浦・大橋（2015）にある。

④ただし、若干の修正が加えられている。

名称	機能	代表的な語形と例
「尊敬語」	主体敬語	「お／御・・・になる」「～（ら）れる」「おっしゃる」「召し上がる」 ここでお休みになってください。 御自分でお持ちになりますか？
「謙譲語」	客体敬語	「お／御・・・する」「さし上げる」 お客様を御案内してください。 書類はあとで私がお持ちします。
「丁寧語」	聞き手敬語	「です」「ます」「ございます」 お席はこちらでございます。
「丁重語」	主体の謙遜	「参る」「申す」「致す」「存ずる」すみません、存じませんでした。

滝浦（2008）は、「これで、日本語敬語のコミュニケーション・モデルを描くことができる。まず素材の次元と対話の次元を分け、そこに敬語の対象となる役割を置き入れ、対象人物の扱いをウチ待遇／ソト待遇で分けると、図のような、2つの次元、3つの役割、2種類の扱いが区別されたコミュニケーション・モデルが得られる。」としている。⑤

【敬語のコミュニケーション・モデル】⑥

素材の次元：	「動作主」		「受容者」
（扱い）	ウチ	ソト	ソト
（素材敬語）	丁重語	尊敬語	謙譲語
対話の次元	「話し手」		「聞き手」

(扱い)		ソト
(対者敬語)		丁寧語

これも滝浦・大橋（2015）では若干の修正がみられる。⑦

素材の次元：	[動作主体]		[動作客体]
	尊敬語	丁寧語	謙譲語
	「お~になる」	「参る、存ずる」	「お~する」
対話の次元：	[話し手]		[聞き手]
			丁寧語
			「です、ます」

ただし、滝浦は「美化語」については扱っていなかった。「なお、本書では「美化語」は取り上げない。」⑧と書いているが、これは、「Ⅲ 文化審議会『敬語の指針』」の最後に（柴田（1989）は最後の〈美化語〉について、「〈美化語〉は自分のステータスを飾る手段として出てきた」という指摘をしていると）確認しておいたように、「美化語」が滝浦の扱っている対人関係配慮表現としての「ポライトネス」の問題ではない、つまり、「聞き手」のポジティブ・フェイスやネガティブ・フェイスを失わせるような言語行動（Speech Act）ではないという意味で、「ポライトネス」の問題ではないからである。では何の問題か。「話し手」側のフェイスの問題である。したがって、「ポライトネス」を紹介して論じている滝浦の著作の中に「美化語」を扱うスペースはないということになる。

注

- ① Brown, P. & Levinson, S. (1987 [1978])
- ② 滝浦（2008）pp.49-73
- ③ Ibid. p.57
- ④ 滝浦・大橋（2015）p.134
- ⑤ 滝浦（2008）p.58
- ⑥ Ibid. p.59

⑦ 滝浦・大橋 (2015) p.135

⑧ 滝浦 (2008) p.57

V 結論

以上、菊地 (1996)、文化審議会 (2007)、滝浦 (2008)、滝浦・大橋 (2015) による「敬語」に関する記述を見てきた。まず、「美化語」を除いた菊地 (1996) の敬語の6分類と文化審議会 (2007) の4分類を比較する。

菊地		文化審議会	
尊敬語	主語・所有者を高める	尊敬語	行為者を立てる
謙譲語 A	向かう先を高める	謙譲語 I	向かう先を立てる
謙譲語 B	聞き手に丁重さを示す	謙譲語 II (丁重語)	相手に丁重に述べる
丁重語	聞き手に丁重さを示す		
謙譲語 AB	聞き手に丁重さを示す		
丁寧語	聞き手丁寧さを示す	丁寧語	相手に丁寧に述べる

菊地 (1996) の「謙譲語 B」「丁重語」「謙譲語 AB」が「聞き手に丁重さを示す」という点で共通なために、文化審議会 (2007) の「謙譲語 II」と対応するものと判断できる。

次に、文化審議会 (2007) の「丁重語」と滝浦 (2008)、滝浦・大橋 (2015) の「丁重語」とを比較する。

	文化審議会	滝浦	滝浦・大橋
尊敬語	行為者を立てる	動作主 (ソト)	動作主体 (ソト)
謙譲語	向かう先を立てる	受容者 (ソト)	動作客体 (ソト)
丁重語	相手に丁重に	動作主 (ウチ)	動作主体 (ウチ)
丁寧語	相手に丁寧に	聞き手 (ソト)	聞き手 (ソト)

ここで明らかになるのは、文化審議会 (2007) と、滝浦 (2008)、滝浦・大橋 (2015) とが、「丁重語」という敬語名としては、対応しているが、その説明にずれが生じているということである。

文化審議会（2007）の「丁重語」は「謙譲語Ⅱ」であって、「自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの。」である。ところが、滝浦（2008）の「丁重語」については事情が異なる。滝浦は、「丁重語」について、「ただし、「謙譲語」のカテゴリーにはすこし問題がある。3分法で謙譲語と分類される語のなかには、動作の受け手にあたる人物が存在しなかったり想定されなかったりするものがある。たとえば、「行く」に対する「参る」、「知る」に対する「存ずる」といった例がそれで、こうした語類は別立てにする必要がある。それらの機能は、“動作を受ける人”を立てることができないので、そのかわりに、“動作をする人”である話し手（側）が純粹にへりくだることであると考えればいい。謙譲語から分離されたこれらの語類は。これまでも「丁重語」などの名で呼ばれることがあった。」②と書いている。

つまり、「謙譲語」の対象者が「受容者」であるのに対し、「丁重語」の場合はその「受容者」のいない場合であると説明しているわけである。

とすると、滝浦（2008）の「丁重語」は＜素材敬語＞であって、＜対話の次元＞の（対者敬語）ではない。

それを明らかにして図に示したのが、滝浦（2008）の【敬語のコミュニケーション・モデル】である。

【敬語のコミュニケーションモデル】

素材の次元：	「動作主」		「受容者」
（扱い）	ウチ	ソト	ソト
（素材敬語）	丁重語	尊敬語	謙譲語
対話の次元	「話し手」		「聞き手」
（扱い）			ソト
（対者敬語）			丁寧語

これに対して、菊地（1996）および文化審議会（2007）の「丁重語」の定義にしたがって、「丁重語」を「聞き手に対する丁重さ」という

観点から滝浦の表に収めると、〈対話の次元〉の（対者敬語）として「丁重語」が位置付けられることになる。

素材の次元：	「動作主」	「受容者」
（扱い）	ソト	ソト
（素材敬語）	尊敬語	謙讓語
対話の次元	「話し手」	「聞き手」
（扱い）		ソト
（対者敬語）		丁寧語 丁重語

文化審議会（2007）の『敬語の指針』により、従来の「三分類」に代わるものとして「五分類」が提唱されたが、その中の「丁重語」とは何かがわかりにくかった。その原因は、以上に展開したように、「丁重語」自体の定義の問題と密接にかかわっている。具体的には、「丁重語」が滝浦の解釈のように〈素材敬語〉なのか、それとも文化審議会や菊地の解釈のように〈対者敬語〉なのか、ポイントはそこだと考えられる。

文化 審議 会	〈素材敬語〉	「尊敬語」	〈素材の敬語〉	滝浦
		「謙讓語Ⅰ」		
	〈対者敬語〉	「謙讓語Ⅱ（丁重語）」	〈対話の敬語〉	
		「丁寧語」		

さて、文化審議会（2007）では、「謙讓語」と「丁重語」との違いについて、「伺う」と「参る」をあげて説明していた。「謙讓語」は〈向かう先〉つまり滝浦（2008）の「受容者」に対する敬語で、「丁重語」は〈相手〉つまり滝浦（2008）の「聞き手」に対する敬語である、というのである。文化審議会（2007）によると、「行く」の「謙讓語」は「伺う」で、「丁重語」は「参る」である。その点は滝浦（2008）も同様である。ただその説明の仕方に相違がある。

文化審議会（2007）の説明では、「謙讓語Ⅰ」の場合、例えば「先生のところに伺います。」とは言えるが、「弟のところに伺います。」

は不自然である。(中略)「謙譲語Ⅱ(丁重語)」の場合は、例えば「先生のところに参ります。」とも言えるし、「弟のところに参ります。」とも言える。「謙譲語Ⅱ(丁重語)」は、<相手>に対する敬語であるため、このように、立てるのにふさわしい<向かう先>があってもなくても使うことができる」③となっていた。

滝浦(2008)の説明では、「受容者」がいるのが「謙譲語」で、「受容者」がないのが「丁重語」④となっていた。

文化審議会(2007)の説明のように、「行く」の「謙譲語」、「伺う」に<向かう先>である先生が想定されるとすれば、「行く」の「丁重語」、「参る」にも<向かう先>である先生が想定できるはずである。

ところが、滝浦(2008)では、「行く」の「謙譲語」、「伺う」には「受容者」がいるが、「行く」の「丁重語」、「参る」には「受容者」がない、だから「丁重語」なんだという説明であった。「受容者」としての先生はあり得ないのか。

たとえば、「いたす」の受容者として「いたされる人(される人)」、「申す」の受容者として「申される人(言われる人)」、「参る」の受容者として「参られる人(行かれる人:これは受け身である:筆者注)」、「おる」の受容者として「おられる人(いられる人:これも受け身である:筆者注)」というふうに考えてくると、「丁重語」は「受容者」がないから「丁重語」なのではなくて、「丁重語」は<相手>・「聞き手」に対する敬語であると考えたほうがよさそうである。

最後に「ござる」について補足的に考えてみたい。「ござる」には「だ、です」に対応するコピュラとしての意味と、「ある、いる」に対応する存在の意味と、二種類の意味がある。一応ここではこの二種類の「ござる」について統一的に考えておきたい。といっても、この二種類の「ござる」が別の敬語である可能性を排除するわけではない。

「ござる」は「対話の次元」の<対者敬語>である。そうすると可能性としては「丁重語」か「丁寧語」であることになる。「丁重語」

も「丁寧語」も、「聞き手」・「相手」目当ての敬語である。そうすると、「ござる」は「丁重語」でも「丁寧語」でもいいことになる。違いは、「聞き手」・「相手」に丁重さを示すのか、「聞き手」・「相手」をソト扱いするかである。「です・ます」が「丁寧語」であるのであれば、「ござる」は「丁重語」ではないか。

そう考えると、一般に「ございます」は「丁寧語」の「です・ます」よりも丁寧な形と位置付けられているが、「ございます」の内部構造からみると、「ござる」は丁重語、「ます」は丁寧語であるという結論になる。これは「参ります」「申します」「いたします」「おります」等と平行的な解釈であるから説得力があるのではないか。

注

- ① 北原編（2011）『明鏡国語辞典（第二版）』には「丁重語」に関する記述があるが、その内容はほぼ文化審議会答申（2007）『敬語の指針』に準じているので、ここで改めて紹介することはしなかった。
- ② 滝浦（2008）p.56
- ③ 文化審議会（2007）p.19
- ④ Ibid. p.56
- ⑤ 滝浦（2008）p.56

文献

菊地康人（1994）『敬語』角川書店（現行版は、（1997）『敬語』講談社学術文庫である。）

菊地康人（1996）『敬語再入門』丸善ライブラリー

北原保雄編（2011）『明鏡国語辞典（第二版）』大修館書店

国語審議会（1952）『これからの敬語』文化庁

国語審議会答申（2000）『現代社会における敬意表現』文部科学省

柴田武（1989）「日本語言語学第五回 敬語の網にからまっている日本人——その一」『月刊日本語』アルク

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店岩波新書

滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社

滝浦真人・大橋理枝 (2015) 『日本語とコミュニケーション』 放送大学教育振興会

文化審議会答申 (2007) 『敬語の指針』 文化審議会

Brown, P. & Levinson, S. (1987 [1978]) 『Politeness : Some Universals in Language Usage.』 Cambridge University Press. (邦訳は、ペネロペ・ブラウン、スティーブン・C・レヴィンソン [田中典子監訳、齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳] (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 研究社)